

性に関する予防教育 — WYSH教育の視点から —

木原 雅子

京都大学大学院
医学研究科准教授



る。教育が独善(非科学)に陥らないためには、効果評価が不可欠だからである。

文部科学省、厚生労働省が連携し、小・中学校、高校などを対象に進めてきた知識・技術伝達型の「性に関する予防教育」ウェル・ビーイング・オブ・ユース・イン・ソシヤル・ハピネスの頭文字を取り、WYSH(ウィッシュ)プロジェクトと呼んでいる。その代表を務める木原雅子・京都大准教授(医学博士)は、不登校問題などにも有効だと訴えている。

第2は、危機管理教育と人間基礎教育の「二階建て」になっていること。WYSH教育は、①性に伴う危険を身近な事実として認知してもらうための情報提供(危機管理教育)と②生きる基礎となる、丁寧な人間関係の大切さや自尊感を醸成する内容(人間基礎教育)で構成されている。

しかし、その後、数十万件の質問紙調査や面接調査によって性の問題を社会的に掘り下げていく中で、それが現代の若者が抱える問題の一つにすぎないこと、また「人間のつながりの希薄化」「夢・希望の喪失」「自尊感の低下」などが若者の諸問題の根底に共通することが分かり、知識・技術の提供といった表層的な対応だけではなく、そうした深い問題へのアプローチが問題解決の上で不可欠であると考えられるようになった。それに伴って、「Sexual Health」を「Social Happiness」に改め、現在に至っている。

第3は、課題提供型教育であること。授業をする側が結論を押し付けるのではなく、必要な情報やメッセージを送った後は、個人もしくはグループワークで、生徒自身に考えてもらうのである。

◆ WYSH教育

が、性に関する知識・態度・行動の改善に有効であることは、数多くの中高生における実践で実証されているが、最近、WYSH教育参加校から、不登校生徒が激減した▽教科を超えた教師の連携が生まれた▽生徒との関係が良くなった▽教師としての自分の在り方が変わったという、一見、「性に関する教育」とは無関係と思われる経験が寄せられるようになってきた。

自尊感育て不登校にも有効

WYSH教育とは、日本の社会文化に適した予防教育を求めて、私たちが開発してきた国産の予防教育モデルで、もともと「WYSH」がWell-being of Youth in Sex

「Sexual Health」を「Social Happiness」に改め、現在に至っている。

WYSH教育には、いくつかの特徴がある。

第1は、科学的であること。WYSH教育の内容は、膨大な調査データに基づき、かつソシヤルマーケティングや行動科学などの理論に裏打ちされている。また、参加校には、事前・事後の調査によって、授業の効果評価の実施を求めている。

第2は、科学的であること。WYSH教育の内容は、膨大な調査データに基づき、かつソシヤルマーケティングや行動科学などの理論に裏打ちされている。また、参加校には、事前・事後の調査によって、授業の効果評価の実施を求めている。



第1は、科学的であること。WYSH教育の内容は、膨大な調査データに基づき、かつソシヤルマーケティングや行動科学などの理論に裏打ちされている。また、参加校には、事前・事後の調査によって、授業の効果評価の実施を求めている。

第2は、科学的であること。WYSH教育の内容は、膨大な調査データに基づき、かつソシヤルマーケティングや行動科学などの理論に裏打ちされている。また、参加校には、事前・事後の調査によって、授業の効果評価の実施を求めている。